

全 学 共 通

国 語

(60分 100点)

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- ② 解答にはH BまたはBの黒鉛筆（シャープペンシルはH BまたはBの芯であれば使用可）を使用しなさい。
- ③ マークシートの解答用紙には、氏名、受験番号、科目を記入する欄と受験番号、解答科目をマークする欄があります。
- ④ 解答方法は、マーク式（解答番号を選択する方式）です。マークシートの解答用紙にマークしなさい。
- 例えば、**10**と表示のある問いに対して③と解答する場合は、下の（例）のように**解答番号10の解答欄の③にマーク**しなさい。
- ⑤ 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高くあげて監督者に知らせなさい。

解答番号	解 答 欄
1 0	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

（例）

※ 問題に使用した文章の表記は、一部改めた場合がある。

国

語

□ 次の文章は、筆者が宗教について解説するもので、「ハリリさん」(ユヴァル・ノア・ハリリ、イスラエルの歴史学者・哲学者)の著書『サピエンス全史』(柴田裕之訳)を踏まえている。これを読んで、後の問いに答えなさい。

紀元前一千年紀、^(注1)多神教や^(注2)一神教とは明らかに異なる「自然法則を信奉する宗教」がアフロ・ユーラシア大陸で広がりはじめます。その代表格が、古代インドに誕生したジャイナ教と仏教です。ほかにも中国で誕生した道教や儒教、ヘレニズム時代に古代ギリシアで生まれたストア主義やキニク主義、エピクロス主義なども、この一派に属するとハリリさんは述べています。これらに共通するのは「世界を支配している超人的秩序は神の意思や気まぐれではなく自然法則の産物である」ととらえた点です。

すぐに仏教の話に入りたいところではありますが、その前に、仏教以外の自然法則を信じる宗教について少しだけ触れておきましょう。

まずはジャイナ教。ジャイナ教は仏教とほぼ同時期にインドで誕生した宗教で、仏教が否定した苦行を肯定しているところが特徴的ですが、基本的な世界観や教義は仏教と似ています。私たちは業^{ごう}という、一種の物質的悪要素が充満した世界で生きており、私たちが強い意思作用を起こすと、自動的にその業が私たちの内部に流入してきて、私たちを苦へ導くと考えます。ですからジャイナ教徒は、苦行や正しい生活によってその業を振り払い、二度と流入してこないように防御すること、真の安楽に到達できるということです。

このジャイナ教の世界観においては、どこにも絶対神やありがたい救済者は想定されていません。この世を^{つかさど}司っているのは自然法則であり、我々は、その法則を熟知することで、真の生活への道を見つけ出すことができるのです。このようにジャイナ教は、宇宙を支配しているのは神ではなく法則であり、欲を捨てて解脱^{げだつ}を目指すことが心の安定につながると説きました。

中国に誕生した道教の場合なら、宇宙と人生の根源的な真理を「道(タオ)」と呼び、人間はそれに従って無為自然に生きるべきだと説き、仙人のような生活を理想と考えます。一方の儒教は、いわば道徳理論のようなもので、社会秩序を重視し礼を重んじて仁義を実践しながら、上下の秩序を守って生きることが幸せにつながるとしています。

ヘレニズム哲学の領域ならば、ストア主義は、「自然に従って生きる」をモットーとし、病や死も自然の中の不変の法則であり、人間がすべきことはそれを受け入れることだと言います。キニク主義はキニコス派とも言い、無為自然を理想として物質的な贅^{ぜいたく}沢を否定し、無欲、無所有こそが幸せの要件であると考えました。もう一つのエピクロス主義は、禁欲的なストア主義やキニク主義とは異なり、人間の生命も原子でつくられているので死を恐れるのは無意味だと説き、適度な快楽を求めるのは正しいと説いています。

これらが「法則を信じる一派」として **A** ハラリーさんが挙げた宗教です。理想とする生き方や幸福についての考え方はそれぞれ違っているものの、どれも「神」の存在にはほとんど関心を示さず、なんらかの法則がこの世には存在し、それに従って生きることが幸福につながると説いているところがポイントです。

仏教もこれらと同じで、神を信じるのではなく、法則性の存在を信じる宗教です。「でも、仏教ではお釈迦様を神的存在として崇めて

いるのだから、仏教も一神教では？」と思われる方がいらっしゃるかもしれません。

X 現在の仏教では、釈迦を神格化し仏像をつくって拜んでいます。しかし、仏教は本来、釈迦を超越者として崇拜するのではなく、釈迦が修行の末に発見した「この世の真理」を信じる宗教として誕生しました。釈迦というのは、その真理を発見し、私たちに教えてくれた偉人ですが、あくまで、インドに実在した私たちと同じ普通の人間なのです。

では、 **B** 釈迦が発見した「この世の真理」とはいかなるものだったのか。

釈迦はまず「縁起の法則」によって、この世界は成り立っていると考えました。縁起の法則では、すべての事柄や現象は独立して存在しているのではなく、原因があつてはじめて結果として現れると考えます。これは科学という因果律と同次元の原理なので、そこには当然のことながら絶対神や霊的な神秘性などといったものは一切介在しません。

続けて釈迦は、すべての事柄や現象は縁起の法則の中で一瞬だけかたちとして現れているに過ぎず、ととらえました。

「私」という存在も同様です。「私」とか「私のもの」にも実体がなく、さまざまな関係性の中で一時的に存在しているだけで、永遠不変のものではないと考えます。

そして最終的に、釈迦は「人間の苦しみの原因となつてるのは欲望（煩惱）であり、縁起の法則を理解し、法則を踏まえたうえで正しい生き方を選択すれば、欲望は消滅し、心の **a** 安寧が得られるはずだ」という結論にたどり着きました。

人間なら誰しも欲望を持つて当然です。性欲、食欲、睡眠欲などは人間の本能として生まれつき備わっているものですし、どんな欲望も、それが叶えられれば喜びにつながることを思えば、「欲望＝生きるエネルギーの源」とも言えます。それなのに、なぜ釈迦は「欲望を苦しみの原因」ととらえたのでしょうか。その理由をハラリーさんは、次のように説明しています。

心はたとえ何を経験しようとも、渴愛をもつてそれに応じ、渴愛はつねに不満を伴うというのがゴータマ（釈迦＝引用者注）の悟りだった。心は不快なものを経験すると、その不快なものを取り除くことを渴愛する。快いものを経験すると、その快さが持続

し、強まることを渴愛する。したがって、心はいつも満足することを知らず、落ち着かない。痛みのような不快なものを経験したときには、これが非常に明白になる。痛みが続いているかぎり、私たちは不満で、何としてもその痛みをなくそうとする。だが、**C** 快いものを経験したときにさえ、私たちはけっして満足しない。その快さが消えはしないかと恐れたり、あるいは快さが増すとを望んだりする。(下巻28―29頁)

「渴愛」とは仏教語で、喉の渇きに耐えかねた者が激しく水を求めるような強い欲望、執着(しゅうじやく)（仏教では本来「執著」と書きます）を意味し、煩惱の中でもきわめて強いものだと考えられています。なぜ強いかというと、渴愛は常に不満を伴うからです。

何かを求める気持ちがあると、それが手に入らないときに私たちは不満を感じます。そして、たとえ求めていたものが手に入って一時的には満足したとしても、その快感がいずれ消えてしまうのではないかと恐れたり、さらにもっと強い快感を追い求めようとするので、渴愛はさらなる渴愛を生み出すことになります。

Y 釈迦は「欲望にはどこまで行っても終わりが無いのだから、求めれば求めるほど苦しみは増す。苦しみから逃れる唯一の方法は、求める気持ちを消すことだ」と考えたのです。

続けてハハリさんは、仏教に説かれた「渴愛から抜け出すための方法」をこんなふうに説明しています。

ゴータマはこの悪循環から脱する方法があることを発見した。心が何か快いもの、あるいは不快なものを経験したときに、物事をただあるがままに理解すれば、もはや苦しみはなくなる。人は悲しみを経験しても、悲しみが去ることを渴愛しなければ、悲しさは感じ続けるものの、それによつて苦しむことはない。じつは、悲しさの中には豊かさもありうる。喜びを経験しても、その喜びが長続きして強まることを渴愛しなければ、心の平穏を失うことなく喜びを感じ続ける。

だが心に、渴愛することなく物事があるがままに受け容れさせるにはどうしたらいいのか？ どうすれば悲しみを悲しみとして、喜びを喜びとして、痛みを痛みとして受け容れられるのか？ ゴータマは、渴愛することなく現実があるがままに受け容れられるように心を鍛錬する、一連の**b** 瞑想術を開発した。この修行で心を鍛え、「私は何を経験していたいか？」ではなく「私は今何を経験しているか？」にもつぱら注意を向けさせる。このような心の状態を達成するのは難しいが、不可能ではない。(下巻29頁)

私たちは苦しいことや不幸なことに会おうと、そこから逃れたいと願いますが、その逃れたいと願うのも渴愛です。渴愛は、先ほど申し上げたように、それが叶おうが叶うまいが、さらなる苦しみを生み出すことになります。ですから、そこから逃げ出そうとするのではなく、「現実を、渴愛のない状態で、あるがままに受け容れるように」と釈迦は説いたのです。

人間は誰もが老・病・死の苦しみを背負って生きています。しかし苦しみを感ずるのは、それに抗おうとするからです。縁起の法則に従って「永遠の命など存在せず、人間は誰しも老いさらばえてやがては死ぬ」と考え、それを素直に受け止めれば、死に対する悲しいという気持ちは消えずとも、心は安定する——そう言っているのが、前半部分です。

後半部分では、仏教に示された「現実をあるがままに受け容れ」る方法が書かれています。ここでハラリさんは非常に深いことを言っています。釈迦が発見したのは、心を鍛えるためのトレーニング法であり、その瞑想修行で「私は何を経験していたか？」ではなく、「私は今何を経験しているか？」に注意を向けることによって、心は鍛えられると言うのです。非常に的確な表現で、こんなふうに仏教を説明できる人は、お坊さんでもなかなかいないと思います。

ハラリさんはイスラエル出身のユダヤ教徒ですが、仏教に強い興味を持ち、ミャンマー人の瞑想指導者サティア・ナラヤン・ゴエンカさんのもとで瞑想修行に励んだこともあったそうです。瞑想の意味や目的を完璧に理解しているのは、おそらく実体験で仏教を学んだからでしょうが、さらに彼がすごいのは、釈迦の時代の仏教から大乘仏教成立に至るまでの仏教の流れについてもしっかりと把握している点です。

(佐々木閑『宗教の本性 誰が「私」を救うのか』による)

(注) 1 多神教——神や超越者が多数存在する宗教。複数の神々を同時に信仰する。

2 一神教——神は唯一だとする宗教。特定の神だけが絶対の存在とみなされ、その神のみを信仰する。

問 1 ☒ X、☒ Y に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は ☒ 1 ☒ 2。

☒ X 1 ① 要は ② しかも ③ たしかに ④ たとえば ⑤ さらに

☒ Y 2 ① ところで ② しかし ③ もちろん ④ つまり ⑤ たしかに

問2 波線部 a～b の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。 解答番号は **3** ～ **4**。

「a 安寧」

3

- ① 丁寧で安心な状態 ② 天候がよく安定した状態 ③ 落ち着いてのんびりした状態
④ 悠然とあわてない状態 ⑤ 平穏で安らかな状態

「b 瞑想」

4

- ① まぼろしを思い浮かべること ② 心を静めて無心になること ③ 思い詰めてのぼせること
④ あれこれと思いをめぐらせること ⑤ 心を集中して思いを凝らすこと

問3 「A ハラリさんが挙げた宗教」とあるが、ここという「宗教」を指すものとして**適当でないもの**を、次の中から一つ選びなさい。

解答番号は **5**。

- ① ジャイナ教 ② 仏教 ③ ストア主義 ④ キュニコス派 ⑤ 道徳理論

問4 「B 釈迦が発見した『この世の真理』」とあるが、「この世の真理」の内容を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。 解答番号は **6**。

- ① 原因があつてはじめて結果が現れるので、すべての事柄や現象には絶対神や霊的な神秘性などが介在している。
② 釈迦を超越者として認め、神的存在として崇めることにより、人間は理想の境地にたどり着くことができる。
③ 自然法則を踏まえた正しい生き方を選択すれば、欲望は消滅させることもでき、その方法として瞑想法が有効である。
④ 人の心はいつも煩惱で渦巻いているが、そこから抜け出すためには現実をあるがままに受け容れることである。
⑤ 世界を支配するのは超人的秩序のある神や神の意思や気まぐれではなく、宇宙と人生の根源的な法則である。

問5

「C 快いものを経験したときにさえ、私たちはけつして満足しない」とあるが、筆者によれば、それはどのようなみで起こるというのか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は 7。

- ① 何かを望んでそれが手に入ると、私達は一時的には満足するが、その欲望は消えずに残るのでかえって不快になり、さらにもっと素晴らしい物を手に入れなくてはならないとの循環にはまり、それが快感へと変化する。
- ② 何かを望んでそれが手に入ると、私達は一時的には満足するが、その快感はいずれ消えてしまうだろうとあきらめるので、もっと強い快感を追い求め、快楽に頓着するようになり、それが終わりのない苦しみを引き起こす。
- ③ 何かを望んでそれが手に入ると、私達は一時的には満足するが、その快感がいずれ消えてしまうのではないかと恐れ、さらにもっと強い快感を追い求めようとするので、自分の欲望が尽きることなく生み出され続ける。
- ④ 何かを望んでそれが手に入ると、私達は一時的には満足するものの、その快感はいずれ消えてしまうのではないかと恐れるうちに、さらにもっと強い快感を追い求めようとする快楽的欲望が沸き起こり、その欲望に自我がむしばまれる。
- ⑤ 何かを望んでそれが手に入ると、私達は一時的には満足するものの、その快感は消えないで続くのに、さらなる強い快感を追い求めようとする姿勢が沸き起こるので、そうであればあるほど苦しみの連鎖に陥っていく。

問6

文脈上、に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 8。

- ① あらゆるものは変化せず、消滅することもない
- ② 一部のものは常に移ろい、一部のものは少しずつ変化し続けている
- ③ あらゆるものは常に移ろい、変化し続けている
- ④ 一部のものは移ろうが、その他のものは変化し続けている
- ⑤ すべての事柄はほろぶが、現象はほろばない

問7

本文の内容と合致するものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は 9。

① 釈迦は心が何か快いもの、あるいは不快なものを経験したときに、不安になるので、そのような時、ただあるがままに理解することができれば、苦しみはなくなり、悲しみも感じなくなると説いたが、それによって人が本来もつ悲しさの中の豊かさは失われてしまうことになる。

② 釈迦は、すべての事柄や現象は独立して存在しているのではなく、原因があつてはじめて結果があると考えるので、私たちは常日頃から自身の行動を日々繰り返し、内省をしっかりと行い日々精進し、あるがままの自分を受け入れることができれば、私たちは日々、穏やかな生活を送ることができると説いた。

③ ジャイナ教は仏教と似ていて、私たちは一種の物質的悪要素が充満した世界で生きているとされ、私たちが強い意思作用を起こすと、私たちを苦へ導くと説き、この強い意志は煩惱と同じで、これは難行苦行を行うことでしか絶対神のいる安楽の世界に到達できないと言われている。

④ 心は何かを経験したとき、心に快や不快を感じ、その快を継続させ不快をなくしたいと願うものであるが、快いものを経験する際に人間は、その快さをいったん味わうと、そのことにとられて他のことを考えられなくなる性質があることから、道教においては、その性質の原因を探り、原因ごとその性質を心から除去することが重要だと説かれている。

⑤ 仏教は、釈迦を神格化し仏像をつくって拝むことから一神教であると思われがちだが、実はそうではなく、釈迦はインドに実在した私たちと同じ普通の人間であるものの、釈迦が単なる人間でないのは、この世の真理を発見し私たちに教えてくれた偉人だということによる。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

精神分析は、その名前の通り「精神 (psyche)」を「分析 (analysis)」する実践方法とそこから得られた知の集積である理論から成り立っている。わが国では、この理論の部分だけが不釣り合いに「輸入」され、精神分析と言えば人の心について知的に説明するだけで実践には役に立たないと思われるがちであった。学校現場でのスクールカウンセリングなどの心理臨床活動においても、精神分析は「頭でっかち」なアプローチであったり、^a 教条的な心理療法至上主義であったりして現場が必要としていることを提供できない実践であると批判されてきた。

しかし、精神分析の対象であるpsycheとは、mind (認知的な心) と異なり、人の情念の中核を指す。つまり、精神分析は何よりも実際の人間の情念に満ちた心に触れ、それについて考えていく営みなのである。学校現場に拘わらず、心理臨床の現場は、まさしく人の心のどろどろした情念が人間関係の中で渦巻いている。そうした現場の中に身を委ねて自らの心も動かされながら、何が起きているのか考えていく試みが精神分析なのである。

フロイトによって創始された精神分析実践の中核には、自由連想法がある。自由連想法は、クライアントがカウチ (寝椅子) に横になり心に浮かぶことをすべて分析家に伝えるという方法を指す。クライアントは、こんな考えや気持ちを口にしてはいけなかったか、関係ないとか、変だとか言って黙っているのではなく、心の中に浮かぶものをすべて分析家に報告するように努める。私たちは、「自分はどうである」とか、「こうすべきである」とか考えている。自分の中のそうでない部分については見ないか考えないことにしがちである。しかし、心にトラブルが起こるのはまさしくそうして見ないか考えないで来たことのツケが回ってくるときであろう。特に学校現場のようなところでは、「こうすべきである」とか「本来こういうものだ」式の思考や議論が大変強力になりがちで、「実際はどうなのか」といった〈ありのまま〉に目を向けることが難しくなることが多いようである。

X、これは例えば不登校などで相談に来られる親御さんにもよく見られる傾向である。「学校には行くべきである」「こんな子のはずではなかった」というばかりで、実際の^A 子どもがどんな状態であるか、どんな気持ちなのかに目を向けることが難しいのである。

例えば、ある青年は医師の家庭に生まれてこの方ずっと自分は医師になるものだと思い、家族もそう思っていたところ、青年期になって学校に行けなくなった。分析的心理療法を通じて、この青年の心の中にあるものを^b 虚心に見ていくと、医師になるというのは、^B 自分をよく見せるためのポーズであり、実のところこの青年はずっと〈ありのまま〉の自分を見せれば親が失望すると感じていたこ

とが判明する。さらに自分の〈ありのまま〉を見せられない親に対する憤りや憎しみが渦巻いているので、この青年はそうした自分をさらに見せられなくなり、ますます自分を隠し人に良く思われようと頑張つて来ていたのであった。こうして、この青年は、学童期は大変適応的で成績もよく周りからも好かれていたが、個人のアイデンティティ形成が真に問題になる中学校以降次第に難しくなり、ついに登校できなくなったようであった。この青年は心理療法でのセラピストとの関係の中で自分の〈ありのまま〉を見せ、それが受け入れられる経験をし、新たに自分の生き方を立て直すのには数年の心理療法の取り組みが必要であった。

自由連想は、このように自分自身の〈ありのまま〉を見ていくこと、すなわち内省方法であるとみることができ、これが精神分析実践の基盤であると言えよう。精神分析実践とは何よりもまず、自分自身の心の〈ありのまま〉を見ていくことなのである。さて、こうした議論を聞くと、しばしば精神分析はカウチに横になって自由連想することだけを指すのであれば、やはりそうした実践など考えられない学校現場では役に立たないという人がいるかもしれない。しかし、カウチに横にならないまでも、少し立ち止まって、すぐに「解決策」を求めるのではなく、心の中に何が起こっているかじっくりと見ていくことはできるだろう。それが精神分析実践の第一歩なのである。

しかし、大人の場合、自分の心を見つめそれを言葉にすることが可能であるが、子どもはそれが難しい。クラインは、遊びが子どもの内的世界にアクセスする最良の媒体であることを発見し、大人の自由連想法に代わるものとして遊戯技法を子どもの分析のために開発した。子どもは、自分が感じていることを言葉ではなく、ごっこ遊びや人形遊び、描画などで表現する。教室で非常に暴力的になるある男の子は心理療法にやってくると、動物のミニチュアで遊び始めた。彼がその遊びで作り出す世界は、動物たちは互いに強い者が弱い者をひどい目にあわせる弱肉強食の世界であった。

Y、この男の子が、子どもである彼を守ってくれる存在はいない世界にいると感じていることが、彼の教師に対する暴力の一因になっていることがわかるのである。母子家庭で育ったこの子どもは、幼いころから母親による暴力にさらされていた。

子どもだけでなく、大人もしばしば自分が感じていることを言葉以外の方法で表現する。人の心の〈ありのまま〉を見ていくには、言葉による報告だけでは不十分であり、遊びなどの非言語的表現、さらには振る舞いそのものをよく見ていくことが必要になってくる。そうした意味で、**C**精神分析実践では観察が大変重要なのである。

ここまで述べてきたように精神分析は人の心の〈ありのまま〉をみていくことがその実践の中核になる。ここで人の心は人間関係の中でその姿が現れていくことを認めれば、精神分析的観察は、第一に関係性の観察であることが理解できるであろう。フロイトの自由

連想法は、クライアントが一方的に自己観察しそれを分析家に報告するというものではなく、神経症症状を形成している困難な部分は心の中に浮かんでこず、分析家との関係性に具現化する（これは転移と呼ばれる）ことにフロイトは気づいていった。つまり、クライアントの心の中身の重要な部分は関係性の中に現れるのであるから、関係性を観察することが極めて重要になるのである。さらにフロイトは、クライアントの無意識を理解するのは分析家の無意識であると述べている。とすれば、分析家は自分自身の心（逆転移と呼ばれる）を詳細に観察することが大切だということになる。つまり精神分析的観察とは、クライアントの言動を観察するだけでなく、クライアントと分析家との関係性、そして分析家の心の中に起こっていることを観察することを含んでいるような観察を指す。

この精神分析的観察のスキルが、精神分析実践、そして学校現場などでの精神分析の応用実践の際にその中核になる。このような観察スキルを訓練する目的のために開発されたのが、タビストック方式乳幼児観察である。これは、一九四八年にタビストック・クリニックの児童青年心理療法コースの訓練の一環としてエスター・ビックによって導入された観察訓練法である（Bick, 1964）。訓練生は、経験豊かな心理療法士が指導する、五人くらいから成るセミナーグループに属し、生まれたばかりの赤ん坊のいる家庭を毎週きめられた曜日、時間に訪問し、一時間観察してくる。記録は観察後に取り、訓練生は一回分の観察記録をセミナーに持って来る。セミナーでは、その一回分の観察を、主にそこで何が起こっているかを中心に一時間以上かけて話し合う。こうした観察―記録―討議という営みを赤ちゃんが二歳になるまで続ける。この訓練法は、精神分析的観察のスキルが、観察、記録、討議という三つの要素から構成されていることを明確にしている。

（１）観察

精神分析的観察は、先に述べたように、関わる人の言葉だけでなく、また表情、雰囲気、振る舞いなど非言語的表現に注目するだけでなく、関係性や観察者の心に起こってきたことにも注目する。観察者は観察対象だけでなく、自分自身の心の中に起こってくることに注意を払うのが精神分析的観察の肝である。

（２）記録

記録は、観察によって受け止めたことを言語化する試みである。精神分析的観察は、人の心を捉えるために、自分自身の心を感じ受装置として用いる観察実践と言える。そのために感受する力、感受性を研ぎ澄ますことが重要であるが、さらに何を感じ受したのか把握する試みが大変重要になってくる。いわばカメラで撮った写真の現像階段にあたるこの過程は、この後に続く熟語や話し合いの基盤となる。良い記録が書けることは臨床スキルの要なのである。

(3) 討議

言葉にされた観察は、セミナーに持ってこられ、セミナーメンバーはそれをもとに、何が起きているか話し合っていく。その際に、それぞれのメンバーは、何らかの理論や概念に飛びつくのではなく、わからなさに留まりつつ、自分の頭と心で感じ考えたことを話していく。一つの事象はさまざまな観点から見られることが明らかになり、すぐにはわからなかったことが、観察と討議を続けることで次第に明瞭なパターンが見え始め、その意義がわかってくる経験をしていく。こうしたグループでの討議の経験が、精神分析実践における熟考の基盤になる。つまり、精神分析実践における熟考とは、わからなさに留まりつつ、さまざまな視点の存在を認めながら、次第に一定の定式化が現れるのを待つことを指すのである。

タビストック・クリニックでは、上記の乳幼児観察で培ったスキルを、心理療法以外の臨床現場での仕事に応用する実践を行っており、それはワークディスカッション・セミナーと呼ばれている。このセミナーでは、受講生それぞれの臨床現場で起こることを詳細に **A** してその **B** をセミナーに持って来、そこで何が起きているか、そしてどういう介入が適切なのか話し合っていく。

このような人間関係の中で起こっていることを、その中に身を置く自分自身の心に起こっていることに注意を払うことを通じて（自分の心を受感装置として用いて）観察し、そこで起こっていることをじっくりと考えて話し合っていく。心理臨床の実践方法こそ、学校現場など広く臨床現場で応用できる精神分析実践のエッセンスであると言える。つまり、タビストック・モデルの精神分析実践法は、個人心理療法だけでなく、さまざまな心理臨床の場で実践可能であり、かつ役に立ちうる実践法なのである。

（平井正三「学校現場で役に立つ精神分析」による）

問 1 **X**、**Y** に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。 解答番号は **10** ～ **11**。

X ① だが ② 要するに ③ さて ④ ちなみに ⑤ さらに

Y ① つまり ② しかし ③ また ④ ところで ⑤ たしかに

問2 波線部 a～b の本文中での意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。 解答番号は **12** ～ **13**。

「a 教条的な」

12

- | | |
|---------------------|--------------------|
| ① 時代に即して柔軟に修正しようとする | ② 場面によっては受け入れようとする |
| ③ 融通をきかせず厳密に守ろうとする | ④ 経験にのっとり判断しようとする |
| ⑤ 他人の考えに当てはめようとする | |

「b 虚心に」

13

- | | | |
|------------|----------------|------------|
| ① むなしで | ② うそと気づかれないように | ③ 非常にこだわって |
| ④ すなおな気持ちで | ⑤ すきにつけこんで | |

問3 「A 子どもがどんな状態であるか、どんな気持ちなのかに目を向けることが難しい」とあるが、親が子どもに「目を向けることが難しい」のはどうしてか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。 解答番号は **14**。

- ① 親は子どもの心のトラブルに関して、そのようなトラブルは起こるはずがないと考えるので、子どもがどんな気持ちかさっぱりわからない状態にあるから。
- ② 親は子どもの内面を見ないか考えないようにする構えがしみついているので、子どもの心にトラブルが起こっても、余程の状態でないかぎり気づかないから。
- ③ 親は子どもはこうすべきであるという思考が強いので、自分の子どもが本心を語れたらうれしいと思っているはずなのに、それを結果的に抑圧してしまっているから。
- ④ 親は子どもの話を聞くのをないがしろにしてきたので、子どもが自分の思いを自由に語るのが大変こわく、子どもの心を努めて見ないようにしてきたから。
- ⑤ 親は学校には行くべきだと考えがちであるうえ、特に親は自分の子への期待もあるので、自分の子の現状を積極的には受け入れようとしなから。

問 4

「B 自分をよく見せるためのポーズ」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **15**。

① 〈ありのまま〉の自分を見せれば親が失望するとずっと思い込んできた一方で、自分が〈ありのまま〉を見せれば親に対する怒りが沸き起こり、自分自身が暴力的になるのがわかっていたことから、親の期待通りに振る舞うほうが家庭が平和になると考え、ひたすら本当の自分を見せず、見せかけだけ「医師になる」態度を取っていた、ということ。

② 親に自分の〈ありのまま〉を見せたいと常に思っているのだが、〈ありのまま〉の自分を見せれば親が失望するという考えもあるので、見せたいという気持ちをおさえて親の期待通りに振る舞うほうが親が喜ぶと考え、本当の自分を見せないで生きてきた結果、いつの間にか自分の中に「医師になる」構えがおのずとできていた、ということ。

③ 〈ありのまま〉の自分を見せれば親が失望するとずっと思い込んできたと同時に、自分自身も〈ありのまま〉を親に見せれば親が怒り、それに対抗する自分も暴力的になるのがわかっていたので、それを回避するためにひたすら本当の自分を隠すことに努力してきた結果、自身の偽りの姿として「医師になる」意志を見せていた、ということ。

④ 医師になりたくなかった〈ありのまま〉の自分を見せれば、医師になるのが当然と考える親が失望することがわかっているため、自分自身の〈ありのまま〉が見せられなくなり、その憤りが募るにもかかわらず、自分を隠し人に良く思われようと努力を重ねた結果、親の期待する「医師になる」姿勢を演じざるを得なくなった、ということ。

⑤ 〈ありのまま〉の自分を見せれば親が失望するだろうと勝手に思い込み、そのうえ自分自身の〈ありのまま〉を見せられない親を憎み、そうした自分の思いを親に悟られないようひた隠しにする必要が生じたことから、他人を欺く仮の姿として、「医師になる」「自分を装っているうちに、医師になりたいと装う演技がうまくなっていった、ということ。

問 5

「C 精神分析実践では観察が大変重要なのである」とあるが、「観察」の「重要」な点の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **16**。

① 精神分析は人の心の〈ありのまま〉をみていくために、第一に関係性の観察を行うことが重要で、クライアアントが一方的に自己観察しそれを分析家に報告するという方法ではなく、分析家との関係性に具現化された手掛かりや、クライアアントの無意識を理解するための、分析家自身の無意識的な部分を見逃さずに観察することが大変重要であるということ。

② 精神分析は人の心の〈ありのまま〉をみていくために、第一に分析を行うことが重要で、クライアアントが一方的に自己観察しそれを分析家に報告するだけでなく、分析家との関係性に具現化された、クライアアントの無意識を理解するには、分析家の意識的な部分と無意識的な部分を両方重視して分析しつつ観察することが大変重要であるということ。

③ 精神分析は人の心の〈ありのまま〉をみていくために、第一に関係性の観察を行うことが重要で、クライアアントが一方的に自己の〈ありのまま〉を分析家に報告するというものではなく、そこに具現化されたクライアアントと分析家との意識的なものの関係、そしてクライアアントと分析家の無意識的なものの関係を観察することが大変重要であるということ。

④ 精神分析は人の心の〈ありのまま〉をみていくために、第一に無意識の観察を行うことが重要で、クライアアントが一方的に自己観察しそこで意識したものを分析家に報告するというものではなく、クライアアントが自己観察の中で見いだしたはずの無意識的なものを、分析家は関係性の中で具現化させ、観察することが大変重要であるということ。

⑤ 精神分析は人の心の〈ありのまま〉をみていくために、第一に関係性の観察を行うことが重要で、クライアアントが一方的に自己観察しそれを分析家に報告するというものではなく、分析家との関係性に具現化することのない、クライアアントの無意識的なものを理解するために、分析家の無意識を研ぎ澄ました上で観察することが大変重要であるということ。

問6

文脈上、**A**、**B**に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は**17**。

- | | | | | | |
|---|-----------|---|-----------|---|-----------|
| ① | A 観察、B 記録 | ② | A 観察、B 討議 | ③ | A 記録、B 観察 |
| ④ | A 記録、B 討議 | ⑤ | A 討議、B 観察 | ⑥ | A 討議、B 記録 |

問7

本文の内容と合致するものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は 18。

① 精神分析は、その名前の通り「精神 (psyche)」を「分析 (analysis)」する実践で、そこから得られた知の集積である理論から成り立っている。スクールカウンセリングなど学校現場での精神分析療法は、「頭でっかち」なアプローチが多く教条主義的で心理療法至上主義であると学校現場には全く向かないものとして批判され続けていたが、最近、様々な折衷理論の中で、人の情念を扱う精神分析は学校臨床に活用され始めた。

② 観察は、人間関係の中で起こっていることを、その中に身を置くことによって、自分自身の心に起こっていることに注意を払うことを通じ、そこで起こっていることをじっくりと考えて話し合っていくことだが、その過程で、心理臨床の実践方法を学ぶことこそが、学校現場など広く一般の臨床現場で応用できる精神分析実践的エッセンスとなるので、カウチに寝転び、自由連想を聞くモデルとは異なるとはいえ、十分に役に立つ実践である。

③ 精神分析は人の心の「ありのまま」をみていくことがその実践の中核になるが、人の心は人間関係の中でその本当の姿が現れていくことが多いので、フロイトの自由連想法においては、クライアントが分析家との心理的関係性のなかに具現化させる、クライアントの心の中身の重要な部分を、分析家がクライアントとの心理的関係性を観察しながら把握することが重要なので、分析家も自身の心を詳細に観察することが大切になる。

④ 人が「ありのまま」の自分と周囲が期待する自分とのずれに気付いた時、「ありのまま」を見せることによって周囲がそれに対して失望する可能性を考えるようになり、それによって「ありのまま」の姿を見せられないようになり、周囲への憤りや怒りを抱え、将来の見通しが立たなくなる場合があるが、精神分析的心理療法を通じて「ありのまま」の自分を受け入れられる経験をすることで、そのような心理状態は緩和される。

⑤ 大人の場合、自分の心を見つめその気持ちを言語化することが可能であるが、子どもはそれが難しく、クラインは、遊びが子どもの内的世界にアクセスする最良の媒体であることを発見し、大人の自由連想法に代わるものとして子どものごっこ遊びや人形遊び、描画などを基に分析することで、人の心の「ありのまま」を見ていこうとし、言葉による報告だけにたよることなく遊びなどの非言語的表現をことさら重要に扱うようになった。

三

漢字・語句について、次の問いに答えなさい。

問 A～Hの各傍線部に相当する漢字を含むものはどれか。また、I～Jの空欄に入れるのに最も適当な語句はどれか。それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は19～28。

A エイエイと築いてきた社会的信用を失う。19

- ① 海辺でヤエイをする。 ② エイリな刃物を扱う。 ③ 勝利は主君のエイダンによる。
- ④ 勝利のエイカンを手にする。 ⑤ 調理場はエイセイ的である。

B 公平ムシの態度を立派に貫く。20

- ① ショシ貫徹をめざす。 ② 教育学のシソである人物。 ③ シジョウを交えずに話す。
- ④ 海外に出てシヤを広げたい。 ⑤ この漫画はフウシが利いている。

C 彼は知識量において古今ムソウの男である。21

- ① 箱根のサンソウに首相を招く。 ② 彼女らは一卵性のソウセイ児だ。 ③ 警視庁によるソウサが進む。
- ④ 彼の身の上話はみなソウサクだ。 ⑤ 旅立つ仲間のためソウベツ会を開く。

D 組織がヒダイする。22

- ① ヒゴウの死をとげる。 ② ヒナン訓練を実施する。 ③ ヒロウ宴に招かれる。
- ④ タイヒを作って畑にまく。 ⑤ 自分をヒゲする必要はない。

E ムボウな運転は危ない。23

- ① 駅員にボウゲンを吐く。 ② カンボウの流行を防ぐ。 ③ ボウカン者ではないけない。
- ④ タボウな毎日を送る。 ⑤ インボウ論が渦巻く。

F 不当なレンバイは違法である。

24

① 今の仕事にミレンはない。

② 本社とレンラクをとる。

③ 彼女にレンボの情を抱く。

④ レンキンジュツを心得た政治家。

⑤ 自らのセイレン潔白を証明する。

G 席をカえてもらう。

25

① 仕事のタイマンを叱られる。

② 雪中でタイカン訓練を行う。

③ フタイテンの決意を表明する。

④ 破損品のダイタイ品が届く。

⑤ 梅雨前線が本州にテイタイする。

H 彼の失敗は、選択のアヤマりによるものであった。

26

① ソウゴに助け合う。

② 事実をゴニンする。

③ 人権をヨウゴする。

④ イゴを打つ。

⑤ カクゴを決める。

I 彼女の片言□は時の宰相をも左右した。

27

① 隻語

② 積話

③ 少節

④ 半句

⑤ 一文

J どうにも□に据えかねる話だ。

28

① 頭

② 額

③ 腹

④ 肝

⑤ 足

(問題 終わり)

（
余
白
）